

• 0 1 2 3

20

1 2 3

4 5 6 7 8 9

10 11 12 13 14

15 16 17 18 19

20 21 22 23 24

25 26 27 28 29

30 31 32 33 34

35 36 37 38 39

40 41 42 43 44

45 46 47 48 49

50 51 52 53 54

55 56 57 58 59

60 61 62 63 64

65 66 67 68 69

70 71 72 73 74

75 76 77 78 79

80 81 82 83 84

85 86 87 88 89

90 91 92 93 94

95 96 97 98 99

100 101 102 103 104

繡像  
復讐  
若見英雄錄

四輯五



遠  
2509  
35-26

繪本復讐英雄錄四編卷之五



直言と贈りて豪士公私と讐を  
陥渉と候て宿高見孫子傳よ

承縁十年丁卯夏月十五日の辰の別小三日向を長  
経のあはれ九多九扇連敷よりて安倉又出ゆに松根  
光絶と並び歴あふ石とけく面と番しけけ面む扇が又  
傷せ一故ひの者ま死せるともうてね筋緋と乳えん等ふ  
宴時歴下凡抑扇にて昨日都下六角堂前の細殿舗等  
尾巻毛等が清や茲ありわ扇の下井絹緋の郷ふえた  
ひさうそ羽丸うる者をくぬい被うる業の本とれて主役  
甲幹を効痛己身も屬く彼地小組末して面若うるのと

すらば亦是一巻の主敵あり又彼七名の浮浪人ふらうじんの元本無事  
の光棍こうきんとて翁おきなは耗盡めうじん船の船中ふななかとも候まつくのことをして候人  
と懼おそれまを一車くるまを取とどく目撃めげきせり而もり其そとを打極  
松まつが流流ながれと解わかれよくも可こども翻ひるがえく國譯こくいつとぬぬと既既み候まつる  
をとそんと言いふいふと即そく着きもと小鳥ちわらのとへ瞞まかへきて候人の  
よづらよづらとねひゆくと從つ小可このとあらば同窮里どうきゆうりの中なかに拘こり  
辛勞さいろうの乳材にゅざい松清まつきよ度とと云いく人ひとも純識じんしきも左近さうこんより  
替かわきがままと忍しのてゐて爲ためうと著羽あきはうちいりを極きわ松まつと是  
免めんありて小可こへひ対たい戦せんと作つくさまると自赤じせきて猪いのしと摺こす  
五外ごがいがわや小雀こやえまきに紛まぎら鳴なく花はなの疑ながりとくは松  
くらうのううふ達たつせ坐すわへ一陣じんさうと余よまを立たててよく告おほせば

左者さわふり有司ゆうし亮教りょうきょう不向ふむこうの腕うでふ手て奪だつ尾お脣しゆををもも右う者しゃふり  
翁おきなはちうら和服わふくと叔父おきなののとてあつて方儘ほうまん腰こしかふ身みとく身みと  
と一名いっめいがつゝ一いっ名めい亦よ二に隊たいちうら和服わふくが連つら旅りょのうへんへんム甲こうとも因  
く至いたて這首なまくらと済すさせてゆくゆくれぬ御ごまごと吉許よきゆき連つら旅  
まき支まき和服わふくが汝なまくらとと先さきちやあ吉よきと互ひべべと互ひまく流  
もあぞ極きわ松まつも長縁ながね及およ有司ゆうし们みやふ事こともく事ことと諭しゆと互ひまく流  
逐たぐあそび極きわ松まつと叔父おきなと叔父おきなと候まつすかのせゑに済すめて又  
ゆくゆくびが在あつふ出來きしまが長縁ながね合あつて候まつくと候まつも殺ころ小亮教りょうきょう  
り不向ふむこうも多おおも救すくひと滑なめりし由ゆと坐すわつて云いうよ跨くわとて又  
那事なことと落おちまの豫よて下くだる却かく後ごの矯飾きょうせきと淫いん肉にく輕けい佻たうの弊風  
小経こきく似そ的てき拂はくも感かんぢうりのう被はく遠とおに面おもてざわ

せども先船びと速の三津と同様に地方をすねて伸びて船でぞ  
ましもちくとわらがのうとやこゝのあらへらまちあ  
見る回復船の門から廻の尾屋の小廻僕们をしてすり遠里にて  
送小別後の情と速速りぬ先船の一且遅船へゆり主人ふ。事別  
一にて四名西へめど解厄の芳情と謝るべととのひとをもたら  
せぬ敵ぞそん裡うぐ今船回往船にて遅船えも吟と喪り  
ゆき時衙門かよそ僕既ふ那人ふ船者と車ふ伴ひゆぢ。那  
里ふきと一品あふ大人の行幸れ我より付體へあへと告げて  
ゆくまじ隸僕一名と那うへふ隸てきりゆきば程よ。船え  
おゆりぬべと能せる要事もゆつとふいとぞくと傳ふどす  
極ねの終小掛きてまことに到りぬよ。実も一巻の豪氣あ  
て桂もく簷もく役はの奴輝も亦乞へ。産業競も

雨り漁とく夷まうと離船亭に先船と清一て体うりせ當船  
家も喜ふ活年餐も終一時を人を廻ふぬ。公腰絆と後接  
小更て遅ふ出来まく。先船の管行船を歓と。ベリ縁ともく  
めて云うとく船不回生即ちゆうまく跡次かづとほり。へ  
俺のまなづば船飯も固ド。意うちめそも什麼して素う爰船  
家と催せば甚五の笑は。側ある圓扇を拿て然ぞよ。听せ給へ。考三日  
松木ふて和君ハ早く陸ふ上うる。諸人も俺劣らト。立往ふ酒家の女  
们多く俱へ。れば且大家を陸に上らせ。晴静りて徐々船を下んと。一寧  
ね在る。那村松主のみ僕と共に残す居たゞ。親く其丈妻に名告て譚せらむ

ゆく大人と參拜ひて小可に大人の写一めり名利との  
又えて写一めりと幸急迫さればも後み別々時若手扁て  
と告げ極松大人をいとて畠金やどふ少翁大瀧より御法太瀧  
の方へ出あひて妻女達と共にゆくも歎りうだらかに  
活向みひねと弊りて急ぎ行ひぬ事へ支より大瀧の荊  
室が又敵小森自蜀らまを惱きて大瀧へゆき比敵の山宿  
きてゆりしがえく旅宿せかどにあれ業何くまとく幸後  
終究く大人も村松とも消息とえをせざりに時十四  
辰刻のとあり初一石屋甲幹火物と所要ありて二條河  
へ毛利に急ぎゆりて遠し那里的客店ム甲が井より御  
捕役から毛鳥多九郎主殿の伏若よ擁して將毛に接の處

士と見て多す毛舟本の漁船そぞ漂まつては萬石をば  
打縄そもお店うそ同されば信くの由うそ且年老の村松  
氏へも御力と近へゆとの本うそばも少翁ふせりぬと考る  
小可も碌くやどりを急ぎ元を主とゆる毛野うる  
諸吏へ窮よ探極て救ひまんと毛野へ歸りハ亭年  
の時候とせぬうち多九郎をい既ふ者而ふゆりて立け  
對面毛野大人の本と同よ毛鳥氏のうそ飯と才門  
お店うそせゆりと吻合して社屋その先事とえへゆる  
小可那人ふ大人の上と我旧お識そ結珠をふ久とき處を  
且毛經紀の毛主うそと言爲作の養経家の三老院東四  
の武士の備歎ねの間牒四つもやと疑ひゆと當一時の計

長縁よ褐

甚五

植松が寃の  
泥と解く

雁多尾を甚五



たりと次ふ彼七名の浮浪人が強暴兇惡の続々と之の船中うそあり先景とゆりて一向大人と譯へゆりてと死にて死を受くに至て有りて彼と死と出生るべくも精襟の文へ縫くそ官うさんと告ふされやうに増く縛れても死びと併に又更ふ死ふ事くよ及ばずと急ぎゆりてはの像く教襟と写し一撫へて回往歎へをくせに迄ては沙汰あらん且互きとの旨を差て歸路ふ丸鳥氏及そ他の諸侯内丙丁の扁西へ到り苦ふ嘔え措てゆりにその夜艾二鼓左側小村ね主の便とて実作とゆく主姫にてると四封の金とト齎へまう大人より若きりぬひ日晏の一橋本の坂かの絆後先生の件とて爲くものありま

とて大人と那黨と試験の本願未詳ふとよきて而を然まとの折あらうがる未覺甚者们へ患者みて自盡自済もありて植松氏の思慮あきらぬ智勇の人あまば寝起てみじめ不妙な事のあまざが方に一を盡不收の緋あらん小舟へ以舟植松氏の上と左の右の身の緋只一面の更をうつ因ん一段の身寄りまで家貧故に處の縁ふ呂ひきもく怪よ懲罰くく緋と委ねて死をうすめぬいひで秋ふかくして植松大人の東人へとあひねとて彼三封の金子へ作爰主師弟と材木をより扁ふ賤ふとて贈あひと柳若の寡歌清虧とて生ふり更を終びとて人夫のみを破るの什麼とおせうやもと僕小村ねふ差寄く

遠里へよりあひに今般の變に村松さん備も費用の多く  
んとあると別ふ一封の金と副く絶く二十両と小可にあらえ  
て尚更作の多くと洋ふ多きとせば、うち多き難もふ偏も  
益感激して遠里の勤勤と往復同往駆の首尾頗くも是  
ねば掛念もあひそと僕の人ふ多きとぞせ画書ともをうは  
をうきども今宵ひ多き方に止宿めとぞむひきど室宿ふ偏  
と苗重りまび正りんさんと那二十両の収帳との接て山画報  
を明教送致トリんとをじして賜うべどとてゆりし程よひそ  
人とがまごわぐ方よりをせんと那定富と向をつと終  
てド田書と作く小廝ふわときぬれが小可へまきて才脚と  
允る連敷めと多きの因縁荒へきに清走さう若來  
すまし卦とと稟て那里の首尾と候ひせんに教よ示され  
えん眼がき聞かうて一矢と運へとを答やう今日ふを  
ふ歴うち大人を取咎ふ出来とておどりがて那地へ卦  
をしに奉き大人と付度ありうる所に可笑ふとお家  
降く莊主御へ感謝ふ邊ぬ所と抬げ主事へ主人の多村  
ね民の志世ふゑうてふあきまう幸焉へ坐と登くも彼  
せ一の那先流行の又も那里ふ卦とて洋着村松あ個の義ふ  
仇もる事もあんうとせりと許よ小心と申すが承へ被人のゐ  
ふゑう人へ亦承時よ深くもあらゆるを承へ且措て柔うけ  
圓の隠へ故ほの男者あんと疑をほ情由をば假令是不  
のうと上圓承あふとめ承く狀さうくもあぬと懸坐小緯

御ノ内侍の性雙人ふ務まで正首うると知りかく  
五うとも云ひ難き辯を寧々うといひつゝ、不トと歎りて  
遠是偽が惑と解ん時もまへ勝度の口言へ中づにとも  
宿ノ内流季の風俗理義みへ跡く茭白とあるわゆ  
あまが改て我と故そん時ふ多く心と費して徳有因に  
人情と納めりもや倩形あんよひす面絶御の涼派人  
み敷くと數世戴君の友育へおもむに似たりそなた  
すき足下の産業の要あまび我を要する結婚郷(注)  
量をきとあうとも我とん経て識前由きと見至う  
至とぞ萬ゆひの松根と似く海せば素う羽ふ恐うせ  
よと瞞く花と渾然殊どの偽が甘心一縫き地方しの我

什麼ちる奇遇るや更清を以身に遠般能まく坐て  
被り欽ひふ良衰と匿そは病をも天賦癖性と性うれを  
ハ幸ちり強き遠示別ふがあらん主人の拘謹せせ  
是ぞ渾の交道をうんと潛ゆに夢ハ情めど渾をされ  
先よ撓すぬ勇士の明辨驚き愧ていと、撓よ殊をす  
も吾の汗を推拭ひ通庸人の及ちもと文あり武あり勇  
士の足跡殆收彼けりぬもと文う小人の荀と辭ふ仰れ  
ども脇と探りて坐せをうん小可うお世く縮と嚮ま  
章ひふ乱世小きし矣くもあ称を父祖を心も惇也に  
て寢に己棄世ハ歎坐と承極て高く却の荒涼び久も嘆  
き皇后と始まつ文友武の名より稱き民の名を

も匱一匱ぬ東西も無なりにすと痛しく歎くの餘り  
捨てにゆきく立てし御ふ候紋と畜へて御楊の破壊  
時人の勞と財を失ふどんと毫も吝まじ息を  
爲し候と後かして人よ貸故に極て多き者うへ私ふと  
へ々報と思ひて漣とせども心全く利とらず者よ仰り  
候と名號と求ふるもあらず又窮ふる者諸侯  
小東西と獻みて暗ふ裏窮の阨と救ひまじもサクレバ  
平生小民する者ハ只各自が家業を努力拵えを力と  
敗と負ふとも敗れ原東天下の城下にて一人一家の敗ふ  
あり絲が斐もくらば密とくらば然天下の勝と負  
哉一りて國ふ益あり自他も固く利益と失んと教ふ

蓋一益城小様奪々の惜うじに水火ふ失んこそ立を失  
村氓市民の身たりともぬの業よ解らで自己が身にまつ  
せく世ふ利あり人ふ益あらんと教ふこそ身の意よ報をも  
ちタゞ一我ふ孫よく是と多きそと云り傳うがふやあ  
代細川殿の時ようして世く爰候家へ附して云の要金と調  
達して云ぬ殿の財ふ立まう強きば這们的のためとて云若流と  
始めも多み同輩は達の多うる小可べ清票知も等閑え  
らを許可せむる這圓の済も亦珍なり珍き是皆足道乃  
度ふ候る幸うて偏が力うれ班もじ根本面識の檢索ふ  
敷く一て友脇へたううどん實ふ看みの理漏過あ可  
が多の班と初の懺悔と是一因ゆく氣ある云ぬ長慶ゆ



植松莊兵衛



再び  
光朝  
義使  
幸崎村  
洞深小

忠六

信濃源氏小笠三原の名族うゞ中葉河波國三好那木附  
て海細川村之姓臣の旗下より属して室町殿おほひしのぶの陪臣ともべと  
しに子孫累世勇武のねよて経よ長慶ながよ年に至りて裏へ  
主家晴元公はるあきと拂斥はつせきけ代てわ軍家くわの対外職たいがいしょくとすら爵くわく  
位いのちふぞり安あんの後將理こうじょうりを更さらより久ひさく幕府の政權せいせんと  
すよせよ連つづふ老病ろうびやくと書かて内うちの飯盛はんせいふ立たても中なか遠とお  
こそ子孫こしゆ義ぎもと暴ばくふ逝去しこよありそ身みの病中びやくちゆうより  
熱傷ねつじやうみ政と因いんふ傷いたずらと猶ゆうなりる後波ごはの十河氏じのみ思  
義ぎ統とう主しと寄よふとて政勢せいせいと彼かれ二老じろうと松永氏まつながふほせよ  
松永まつながの原卑はらひ賤せんの人ひとうちうちふ力ぢから争あらわ吏ひとひ爰あらわ候まつふはは終まつり  
三さん姫ひめおれ孫まごのぼのとて一いつ歲としをふ發迹はつせきてあるが主君しゆきん義長ぎじょうの

賢けん能のうなると憎にくと毒殺どくさつせよほしとの因いんやう憲けんてそニ老おとこ  
と松永氏まつながの既すでふ主し家のの位いのちとふあひ爰あらわ候まつ長慶ながよ主しののト  
とそね歎たん横よこ及およ苦く碌ろくく將軍じょうぐんめとそニ候まつらむと犯はん凌りようすると  
義ぎされば義輝ぎきは深ふかく憤ふんりりめと志しと思おも食く立たつ緯みの學がく一いって  
後ごふきん八年五月又また奉まつ事ことをぬ登の時ときの爰あらわ候まつ長慶ながよ公こう逝去しこよ  
ありと三老じろうと松永氏まつながを世よふ披ひ露ろとびだして太おほ事ことを行は  
一いっ經きよよく皆みな爰あらわ候まつ三さん好いろはの上うえ處ところと弑さむとすりきと呂らひ  
ゲが良よけほよ列はりてこそ憤ふんり地じふを既すでの晴はるめと知し人ひともかかく  
出来できうきび弑さむ不ふきの人々ひとの命みことをうそび善惡ぜんにょくをよ  
可こうかうか一いっ後ごども言い申ま斐ひあると市いち人の塗ぬりをを筆ふ筆ふの具ぐ  
又また怨いどりの生う業わざと失うくとあとちうて陽ひよ下くだ糸いとをうのを衣き

富をも細川氏を排斥し、長慶も之へ弑逆の大恩をうへた。豈の  
て小嗣を殺され家督既脫ふ裏へたり況や後惡弑逆の事も惡  
報をもたらすもんや因ふゆ故に軍兵群衆のひ第一義院門  
主觀を若狭守と改めしゝ内津と義昭云  
と更めぬひゆく東かの諸侯も寄て義旗のひ傍わらず  
まが承の始年萬林院殿御と補佐す。太内義與主  
の如く英雄の名ぬ出く列候と至り名高く令行とぞ  
上流あぐ室町殿と中興とて郵政と陰謀を京都を清らき  
寒一揆が小可仰ち知る所無れど族の二ノ獄と譽異  
輔佐の良政令と聲一ゆの日あらんと約のと今耶ニ志  
志の政ちゆく聲が唐古とて因縁継続とすれどねり

の三族が又祖のを刑と譽と已が和又は世ふれ益あま  
那ふむよろ爲ふ大人の使者陸りての暴と極解めしと免  
側少一てふに主を逃びてはれ孔と法ち民と保ひざる功と  
建ち身うて益ちと争ひうちをと拂ひゆく一句ふ感拔体  
ぬ後まく遠國の太人の泥旅除東國の間牒見つまゝ連続  
と寃ふ義將よはゆる右士あらんふいとて救ひせんと食安  
安吏ふ生サの囑賂と喰ひて一時の糧と用ひてとらひに  
もう今復遠ふ國思せばモ既清くも是へねがゑ腌腊  
も晦くうりと不承つと強く固じて光教の方僅呈下  
速する如く粗忽のを悔ひ徳元とれをそ我迷惑と聞く嘆  
をうき料立と差しがむの後後お聞のを一考財本の洋

海威のやうと組某が一と紹くニと紹うぬ君刀の軍  
隊を娘の三郎の行も孫一と不測ふ一人の良友とゆう  
にうりと歎ぶわら那里の座席の簾廊ふと响まれば  
客主終て旅後ふゆらしきり

極松遺孤と枝て家寓ふ伴ふ

岩見旧称と更て越州と辞を

登下あ三名の侍女们へ各々小盆酒罷子或ひ廣蓋と仰  
居折委小舟檻の酒菜盛りと搬つ、難根亭へあるをと  
主客の辞儀法の如く御ら至と举つ間小モモアヒ食合て  
不意翁より連縵うち長筵よ従晚までゐる主賤内番  
と女兒葛児は往日既小舟中うそて見へあしぬ縁又一名乃

男児ねむるハ經紀の要ありて隔皆酒食へきりて今  
の宿前ふむりゆうど珍ども大人ハ今日より我方几届め  
けりうりの彼们うへん寛て刃せりへ先醫倦小碎と云  
ひべーと嘗待わしも一名の小廝遽く来りてあ幸端  
村ね氏の奴僕二名遠書蘿とおてらひ奉りひと出をと観  
ふ村ねグ主爰美他よりの急書うまびやどうと怪を扱  
因小所十四日の夜坂の住處氏うそて村ね屋敷亭主附經  
諸共よ夜懲の仇あ協摺尾天山們が時よ聲よ一由と達  
いと遠緯と極松大人へは報道と取ひます。詳より這兩僕  
小聲食ゆと書へり遠の今お実作へ事都と出て帰  
りし小幸端よりも実作と云ひ返さんとをらせし二名の急

後小山林<sup>ゆき</sup>を撞<sup>ひで</sup>刃<sup>かみ</sup>つ那<sup>の</sup>劍<sup>けん</sup>の交<sup>か</sup>とうち<sup>う</sup>ち<sup>う</sup>て驚<sup>おど</sup>きなが  
弓<sup>ゆみ</sup>と拿<sup>と</sup>取<sup>と</sup>く遠<sup>とお</sup>由<sup>よ</sup>りもく件<sup>くだん</sup>の便<sup>へん</sup>へも<sup>も</sup>一<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>六<sup>ろく</sup>と<sup>と</sup>亦是<sup>これ</sup>  
正首<sup>まさ</sup>うる者<sup>もの</sup>とひ<sup>ひ</sup>取<sup>と</sup>うその光景<sup>みやうけい</sup>と倘<sup>まことに</sup>舞<sup>まい</sup>尾<sup>お</sup>巻<sup>まき</sup>を回<sup>まわ</sup>る  
附<sup>つき</sup>よ役宣<sup>わくせん</sup>うそとおせて車<sup>くるま</sup>小室<sup>こむろ</sup>へ上<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>そ<sup>そ</sup>筋<sup>すじ</sup>を勧<sup>すす</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>る  
伴<sup>とも</sup>報<sup>ほう</sup>を伴<sup>とも</sup>ゆく急<sup>いそ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>那<sup>の</sup>里<sup>り</sup>へゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>すり<sup>り</sup>ば<sup>ば</sup>をあ<sup>あ</sup>ひ遠<sup>とお</sup>書<sup>し</sup>寫<sup>う</sup>  
と先<sup>さき</sup>教<sup>おとす</sup>よ本<sup>ほん</sup>とて修<sup>しゆ</sup>ふ<sup>ふ</sup>鷲<sup>わし</sup>と<sup>と</sup>呆<sup>あきら</sup>き歎<sup>なげ</sup>息<sup>そ</sup>のかう<sup>う</sup>し<sup>し</sup>う<sup>う</sup>だ妻<sup>め</sup>  
く情<sup>じよう</sup>由<sup>ゆ</sup>と同<sup>どう</sup>鬼<sup>き</sup>んと那<sup>の</sup>二<sup>に</sup>名<sup>めい</sup>の僕<sup>僕</sup>と<sup>と</sup>離<sup>はな</sup>れ<sup>はな</sup>すの巻廊<sup>まきろう</sup>に喚<sup>よ</sup>  
途<sup>と</sup>け<sup>け</sup>く同<sup>どう</sup>果<sup>ご</sup>ー<sup>ー</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>の廻<sup>まわ</sup>て小<sup>こ</sup>廻<sup>まわ</sup>してや<sup>や</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>小<sup>こ</sup>室<sup>むろ</sup>へ付<sup>つ</sup>  
りをぬ<sup>ぬ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と薦<sup>すす</sup>めて晉<sup>しん</sup>約<sup>やく</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>遠<sup>とお</sup>く先<sup>さき</sup>教<sup>おとす</sup>の兵<sup>ひょう</sup>兵<sup>ひょう</sup>と<sup>と</sup>練<sup>ねん</sup>習<sup>く</sup>が  
横<sup>よ</sup>死<sup>しき</sup>と掉<sup>てう</sup>む不<sup>ふ</sup>平<sup>へい</sup>に<sup>に</sup>懇<sup>こね</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>よ<sup>よ</sup>銃<sup>じゆう</sup>ひ惜<sup>惜</sup>うる<sup>うる</sup>伴<sup>とも</sup>友<sup>とも</sup>村<sup>むら</sup>村<sup>むら</sup>  
老<sup>ろう</sup>實<sup>じつ</sup>良<sup>りょう</sup>善<sup>ぜん</sup>一<sup>つ</sup>對<sup>たい</sup>の志<sup>し</sup>曉<sup>よ</sup>ま<sup>ま</sup>國<sup>こく</sup>小<sup>こ</sup>大<sup>だい</sup>ある<sup>ある</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>うり<sup>うり</sup>うるに毒<sup>どく</sup>

水<sup>みず</sup>に食<sup>く</sup>を演<sup>や</sup>せ<sup>せ</sup>の圓<sup>まん</sup>小<sup>こ</sup>洋<sup>よう</sup>場<sup>ば</sup>を憾<sup>おど</sup>き那<sup>の</sup>人々<sup>ひと</sup>の數<sup>すう</sup>を<sup>を</sup>ぬ  
亲<sup>おやぢ</sup>と深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>心<sup>こころ</sup>を殺<sup>ころ</sup>せ<sup>せ</sup>ば<sup>ば</sup>國<sup>こく</sup>守<sup>しゆ</sup>六<sup>ろく</sup>角<sup>かく</sup>敵<sup>てき</sup>推<sup>すい</sup>萬<sup>まん</sup>ん<sup>ん</sup>と心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>系<sup>く</sup>  
固<sup>たて</sup>り義<sup>ぎ</sup>賢<sup>けん</sup>主<sup>しゆ</sup>に仕<sup>つか</sup>と<sup>と</sup>於<sup>お</sup>の志<sup>し</sup>のあ<sup>あ</sup>ざ<sup>ざ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>終<sup>まつ</sup>と<sup>と</sup>村<sup>むら</sup>民<sup>みん</sup>も<sup>も</sup>知<sup>し</sup>已<sup>まし</sup>  
を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>難<sup>むず</sup>ー今<sup>いま</sup>う<sup>う</sup>那<sup>の</sup>所<sup>所</sup>小<sup>こ</sup>卦<sup>くわい</sup>て<sup>て</sup>そ<sup>そ</sup>算<sup>さん</sup>小<sup>こ</sup>卦<sup>くわい</sup>し<sup>し</sup>ん  
又<sup>また</sup>那<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>息<sup>子</sup>清<sup>きよ</sup>二<sup>に</sup>郎<sup>ろう</sup>の性<sup>せい</sup>孝<sup>こう</sup>のサ<sup>サ</sup>年<sup>ねん</sup>も<sup>も</sup>ど<sup>も</sup>沈<sup>ちん</sup>勇<sup>ゆう</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>  
武<sup>ぶ</sup>と<sup>と</sup>嗜<sup>す</sup>め<sup>め</sup>り<sup>り</sup>變<sup>か</sup>て<sup>て</sup>嚴<sup>げん</sup>師<sup>し</sup>慈<sup>じ</sup>父<sup>ふ</sup>の聲<sup>こゑ</sup>と復讐<sup>ふくしゆ</sup>の志<sup>し</sup>ある<sup>う</sup>じ<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>往<sup>く</sup>  
志<sup>むすび</sup>極<sup>きわ</sup>尾<sup>お</sup>天<sup>てん</sup>山<sup>さん</sup>们<sup>めい</sup>の那<sup>の</sup>小<sup>こ</sup>統<sup>とう</sup>え<sup>え</sup>一方<sup>かた</sup>う<sup>う</sup>ぬ太<sup>おお</sup>歎<sup>なげ</sup>き<sup>き</sup>元<sup>もと</sup>遠<sup>とお</sup>般<sup>はん</sup>  
的<sup>てき</sup>難<sup>むず</sup>い<sup>い</sup>亲<sup>おやぢ</sup>が<sup>が</sup>緯<sup>よ</sup>小<sup>こ</sup>固<sup>く</sup>て<sup>て</sup>起<sup>おき</sup>り<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>き<sup>き</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>恭<sup>うやま</sup>と<sup>と</sup>佑<sup>うや</sup>て<sup>て</sup>那<sup>の</sup>  
完<sup>かん</sup>恩<sup>おん</sup>と除<sup>よし</sup>去<sup>はな</sup>せ<sup>せ</sup>世<sup>よの</sup>の豪<sup>ごう</sup>傑<sup>けつ</sup>ふ<sup>ふ</sup>矢<sup>や</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>彼<sup>かれ</sup>奴<sup>やつ</sup>們<sup>めい</sup>が<sup>が</sup>毒<sup>どく</sup>惡<sup>あく</sup>う<sup>う</sup>讐<sup>しゆ</sup>  
冤<sup>ゑん</sup>紫<sup>し</sup>う<sup>う</sup>とも同<sup>どう</sup>僚<sup>りょう</sup>の士<sup>し</sup>岩<sup>いわ</sup>刃<sup>いの</sup>ム甲<sup>こう</sup>と<sup>と</sup>殺<sup>ころ</sup>せ<sup>せ</sup>と<sup>と</sup>呴<sup>く</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>の  
忌<sup>き</sup>邪<sup>じや</sup>三<sup>さん</sup>古<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>緯<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>連<sup>つづ</sup>り<sup>り</sup>出<sup>で</sup>怨<sup>うら</sup>と<sup>と</sup>那<sup>の</sup>們<sup>めい</sup>の<sup>の</sup>も<sup>も</sup>ム甲<sup>こう</sup>が<sup>が</sup>子<sup>こ</sup>

主を扇とせんのむ摺で叶のぬ空氣をもとに村松氏の手に  
摺せたる那人の志と失ひせん。偶岩の人生のみに教されば  
村松が情をもくとも迷はぬ面と刃も如くぬ小剣岩と  
生の跡残さん。嘆されば力と威せんとぐるみをものゝ岩  
凡生の素とあざ人の人うて情残らう紅色の村松の義達  
まけ村松のを孤と彷くべく、卒やち二を六とりのゆうよ伴  
ひやまんと慷慨もやう氣と刃と勇む壯士の波ひ意麗  
壓の感油袖と漫と毛うり通徹妙と大人の使勇ぬひと  
前日村松との消息ふひ身と俺们よ死みゆて一面の吏も  
因心一致の足利の像よやむのくと羅きまし言を案も今ハ死  
念と成へそゆくまき小可町人うれしきあるまども村松との

亦是傳ぐ幻已うるよ友近小高くば豈丈支魂ありと云々  
んや絶どもその表と毛うりえをわくして妙ちくぬ澤み  
べ大人よ能へて香眞の薦儀と毛うり備ふり復讐の奉  
あづべ備がオホ縁ひ緊要へ力と竭うであづまや大人憎  
ふ遠どくよ義く那里の时宣ふ拂りゆくと夢情じまとかくれ  
きく而よ旅とあんと宣承ふえぞ報びと述て度と記兵房  
ハ征装もる火坐の准備よあみも便宣ふ立て白浪と木帆  
封ぎて毛うり極れいわゆる二ふ体て又毛うりへ毛うりけも  
歸く毛うり村松が毛うり到りて清云所。赤樹も急後の  
凶卦小狗降是事よ建那足秀激ハ序の轟小驛一別是庚七



清三郎



復九夷集四編卷之五

とねく歎きもより悲ゆうぞ歎くれあまどか日の内に  
ゆうきぬ竹バ屋に茶樹母子の哀傷悲泣へ云許もす  
多事ども是事の時候小松と久しく苗起ふ小あゆ松  
歎感泣れお涙て至る秋艾葉落が元骸と四下を走る  
華院不善りて葬りぬ松と三月郷人の算へ難る社  
一休義直深経が元骸の墓葬も同ト疾の暉あらしが遠  
亦歎感へがよされど門生ハ更なりキ一郷の人々もじと嘆  
ヘ一美少死後ふ景あわと見そくにその人の平生と初年是  
り縊り絆よ先約が料ら小差りど茶樹の丈の仇峰内寛  
家烈祖ある赤坂主経植尾燈物天山双回三名とも樹塗  
強敵あまびとて懇祈お刃棄て措んやと猶みぬゆう情り

遣方ちもんばを秋艾更園て母の悲泣と歎る言次ふ己が心  
と没明一寃氣の踪跡遠くもあくぬを向よと索て翠墨さ  
んふ枝くぬと賜りしとを惜て清多小悲の中ももに  
ハ茶樹が被まと被ぶりのうに何祈へ行へと御の讐と  
今邊へ来るとも私く多ん由もあに倘も撞刀すある  
とも那三名の大敵と汝の本事ひそむくとてや来て翠安  
忌辰と約ひしと志をうかびを聞へ植松大人と苗めまつ  
せく那方と自ふ秋く武藝と手足を要あまととて隨一  
約ふきを宴席作と喚途け潛よ遙由と高屋小宴作ひ打  
詠びく小友人の雄くしき以志をこそ老太翁の冥魂も詠  
びゆりん翠や那四方ふ托ませゆと懇懃つて母子主僕の五

那難む事に至く、其樹は日毎ふ其藝と教へて、其樹えま  
後々に務ましを事のよきと、自と曰ひ月と累ねく熟練せ  
り余が多事の秋九月の時候ふ先づ其樹と伴ひて、撮酒泉  
もとをか紀伊と感て、伊勢めどりある東山の諸國と竈  
ひき緋より繫ふ野邊。此が本縁十一年二月の中嶺ふ事濟  
ゆめり奉く參樹と長はよきせ駿河とを遠田へ先づ某  
よそ経歴。惄寃泉の照路と済ば急に若報せん余ども清三  
軒へ尋び事師齋尾巻ふをと音信と候ふと總して那黒に  
お托モ亟独り歛跡の天遠く都の氣と物もせぐるのみと  
ゆん猿扇ふ月日と経うて一審ト某生復役事と重をす。  
種事今度九月下旬ふ歎中風山の寓居の東人本田善久

諸々は那里と出でて加賀國竹橋の驛ある延命寺に宿りぬ  
事トあ集の本の  
卷小紙へらり  
来て這里とも立りて日あくにも善助が古郷  
なる濠モリを越りて毛豆若根津七郎が御者あり  
ふ主人の郷  
士こそ食と好む性なる小方善助が活潑とゆてゆく岩谷  
住伏せらむ秋登城中の西廻リ世セと被登國主富山氏の封疆  
をじふあ附將理支平義則富山氏實の足利義則支流の源なり家裏へて麾下  
の衆を故の自立の勢と逞也或も鐵後の極務旗扁ハシマツ小志を寄  
つ國隸記風の像を裂玉トリヤクきよと加賀國へ富樫政頼が累  
代の封地ト約三百八年おほへにさるも亨二年僧院  
兵民の健行ト土役の禍發り漢土の昔布眉紅巾の賊アサヒ  
さぶ那白蓮社ふね業と樹一改も仰る下尉上の達私

珍祥の世象ヤハラウ忽ち滅亡一國隔りて連將叛民亡と刻れと  
今ふ五十年の教既ハナタキ九この久きとよ宣主もより  
竹袂隣モリを波及して城中絶登も西の方へ遠アシカニのあり  
ま國カミを奪略アシカニを爲スルば加賀一國ふ今勇士を用ふ  
法候ハシマツ毛豆若根津七郎ハシマツ一あ日間岩谷イシヤマへり小廣治  
成治大川カミツチ们ふ仰る者もうきうやと多方にねきつま  
ムぞとゆよ者もほ種系も粗は國の先系寛永の扇ハシマツ  
地方トコロうごとひふされぞ跋素ハシマツなづに移ハシマツと毛豆本田  
の毛豆小ゆきと謝ハシマツて毛豆もよ津七郎ハシマツとあつて福く  
牙ハシマツにすけよ大人の毛豆の方へ歸ハシマツんと思ハシマツるもふとや難言を  
寢ハシマツゆ身ハシマツうまびそひはまうべれど那里へ國の姉ハシマツゆ始中

納言後原松經卿以一ゆくとよも本國白山の背面に接して  
東下に酒き地方より山嶺の疎小大なる桶と覆措る  
之都と人知を失ひ路往と推て宿ある所得も約稱を察  
窓にて宿の患ありそと即ち件の桶中に宿主居て夜と  
明を准備とすり旦に奇怪深邃の丸山幽谿那黃海の嶮  
阻えどもて世と逃る隱士の栖とも那廣樂们が妙き惡漢  
名れの心ある者へ経て行ん要は矧玉司の清紳として文  
記の風雲や極格入と或へ甲斐の武田晴信入と小彊を  
侵へ挾へて勢ひうそ武勇の壯士と石川義も初見けり計  
摩也一そと告うを歎ぶ縫衣のまこと足利ふ打窓の袖の端と  
更りく余言も純くて着衣なく姓字を今と更がらし  
れ

お小糸蘿を記のうきかうも讐と寃ゆと後既懲吾  
旧名の包益とゆつと縛事とくに因とせく後自と嘆うこと  
えまが役們の効る由をうじし然べ庸字と通称を野村利  
十郎と更ん地へねて少しごくもあらねども畠山より角井  
氏の二男虎と號良重のサ年をうきを墨至系が鑒金倣する  
不あり矧肺癆の約と結びの本因生和服も効く西へ和服  
畠山へゆりあく潛る遠情由と報ゆてわ腹只交と那サ  
み懸告本とく今い要うきふ紙と紙も絞うて日向と飯波を  
音信せん時迷ふ不收うじと語とをして出羽と飯波を  
謁ぬき人も本因も畠山雅てぞ別まる時よ小春の初うる日  
の比ふをうちうすの種まが野村と庸まと没するに岩の

二字と更るまぐうて言ひ通称と新十角といふ初至十角  
と喚做せり重と十とす義ひ是きども音わゆり曰称の致  
字の音と便て軽ふりのせりとの意を以て間活休歌板も  
縦まへりくて鉢金成(太御門督日)の割接せる誠あの圓ふ入  
遠里那里窟ひつ、終ふ函古た金吾義系の旗下に寄りけ  
るが鉢金成世くの國禁うて他國の淳俗人と苗りを一所ふ  
二夜の高とも许さんば力あるうちとく義校より北近  
にと縦く都ふやくかく入ふたり

繪本復讐言英雄錄四編卷之五終

